

A. 聖書解釈と政治思想

オリエンテーション

導入：脳神経科学とキリスト教

1. 聖書の政治思想とキリスト教社会主義

2. 現代政治思想とキリスト教

2-1：民主主義とキリスト教

2-2：政治的なもの——アーレント、ムフ

7/1

2-3：シュミットからアガンベンへ

7/8

2-4：ジジェクとパウロ

7/15

Exkurs

現代キリスト教思想とユダヤ的なもの

キリスト教と科学技術

7/22

<前回>民主主義とキリスト教

(1) 民主主義と自由主義

0. 広義の民主主義

国家や集団の権力者（主権者）が構成員全員であり、集団の意思決定は構成員間の合意形成に基づいて行う体制・政体。寡頭制、君主制、貴族制、独裁、専制、権威主義などに対立するものとして多義的に理解される。

1. Chantal Mouffe, *The Return of the Political*, Verso, 1993.

Moreover, it would be a mistake to confuse this 'political modernity' with 'social modernity', the process of modernization carried out under the growing domination of relations of capitalist production.

to draw this distinction between democracy and liberalism, between political liberalism and economic liberalism (10)

2. 佐藤光『リベラリズムの再構築 「自由の積極的な保守」のために』工房早山、2008年。

(2) キリスト教と民主主義

3. 「契約共同体、徹底的平等主義、反帝国」と民主主義との親近性

とキリスト教と政治的共同体との関係の多様性。

4. 大木英夫「デモクラシーとキリスト教」（『歴史神学と社会倫理』ヨルダン社、1979年）

(3) ピューリタンの教会政治と民主主義——リンゼイ・テーゼ

・宗教改革の万人祭司の理念の歴史的な具体化として

・神の意志の発見の手続きとして

・直接民主主義とキリスト教とは合致できるか。聖職者の存在意味

5. リンゼイ (Alexander Dunlop Lindsay, 1879 ~ 1952) ・テーゼ：

「ピューリタニズム→イギリス・デモクラシー」

6. ルターの万人祭司論→平等な人権→同意に基づく政治＝民主主義→普通選挙権

「神の前」において ←→ 現実（政治と経済）

7. パトニー討論とその意義

9. 争点＝宗教的な根本理念のレベルにおける選択：

絶対王政と国教会制度を支える階層的秩序（身分制社会）か、宗教改革の万人祭司（神の前の平等主義）か。

10. 同意の原理：レインバラ大佐（レヴェラーズの代表）

11. 民主主義：主権者としての国民の同意が必要。国民の普通選挙権の要求。

「しかし、私はその選挙権という所有権が、イングランド王国においては、他の何者にも勝れて貴族や郷紳や特定の人たちに属する所有権であることを否定する。」(190)

↓

政府や権威者が国民に対する約束（契約）を破った場合には、国民の側に抵抗する権利を認める。「自然法に基づく自己保存と抵抗権」→人間に生得的な人権という観念。

信仰者という点で、聖職者も平信徒も平等である、という万人祭司の精神。

12. 討論の原理：

討論の原理は、「キリスト教の集会の経験」（リンゼイ、1964、32）に基づいている。

キリスト教の集会：「神の意志」を発見すること。それは、異なる意見を持った者たちの討論による。各自が所有する神の意志についての異なる諸部分の知識を討論の中で語り合い、共有し合うときにはじめて、神の意志は十分な仕方、発見される。

14. 集いの意識

15. 「集いの意識」は、ピューリタンの集会という「宗教的民主主義の基盤」の中で体験されていたものであった。

「このことは科学的な理論でもなければ、常識からくる教えでもありません。じつに、宗教的かつ道徳的な原理なのであります。これは、すべての信仰者は精神的〔靈的〕には祭司であるということ、神学的でない言葉にいい換えたにすぎません。」(リンゼイ、1964、19)

(4) 宗教的寛容と政教分離

16. ロックの寛容論→（サウス）カロライナ統治案、カロライナ州憲法

「寛容」(toleration ↔ 「強制」「干渉」imposition)

信仰は個人のことであり、礼拝行為も神と個人の間で良心によって行われ、政府の干渉すべきことではない→非国教徒の自由を政府は認めるべきである。政教分離。

(政治権力の基礎＝原始契約→無神論＝無政府論。無神論とカトリックへの不寛容。)

17. 自由の伝統

- ・ピューリタンと信教の自由をもとめた脱出（ピルグリムの渡航）
- ・「メイフラワー契約」(1620/11/11)：「お互いが契約により結合して市民政治体を形成し、共同の秩序と安全を保ち、法律と公職とに服従すること」。上陸に先だって、「よそ者」との間で。→「多元国家アメリカ」の原型：異質な価値観を持つ者が相互の合意と契約によって新たな権力の正統性を創出する試み。
- ・ヴァージニア信教自由法
- ・「権利章典」(＝憲法に付随する10カ条の修正条項)：連邦政府に対する各州の権限尊重を明記。

18. 歴史的プロテスタンティズムの限界

信教の自由を求めた移住という伝統。これは自分たちの信仰の自由を求めてのことであり、他の人々の自由を保障するという意識に基づいていたわけではない。クエーカーへの弾圧。

19. 公定教会制 (established church)：

20. ロジャー・ウィリアムズ(1603-1683)：公定教会制へ反対。「政治権力は個人の信教の自由に及ばない」。

21. ウィリアム・ペン (1644-1718)：ペンシルヴェニアの地で、クエーカーなど宗教上の迫害を受けていた人々の保護。アーミッシュを含むメノナイト派、モラヴィア兄弟団など。

先住民との友好関係。

（5）宗教的寛容論の系譜・歴史的なキリスト教的諸形態を超えて

22. ヨーロッパ諸都市における宗教的寛容ネットワークの存在

・中世ヨーロッパにおけるアジュールのネットワーク？

23. ハンス・B・グッギスベルク『セバスティアン・カステリョ 宗教寛容のためのたたかい』新教出版社、2006年。

Exkurs

現代キリスト教思想とユダヤ的なもの(1)

1. アウシュヴィッツの衝撃

この現実がなかったかのように、神学的思索を行うことはできない。

キリスト教神学の現状と問いとしてのユダヤ的なもの

「およそ過去二〇年間のドイツのプロテスタント神学、なかでも組織神学の分野を振りかえるとき、「とぼしい時代」と言うのほかない。一九六〇年代から七〇年前後にかけて、新しい時代の創造と意気ごみながら、過去の伝統を容赦なく破壊したにもかかわらず、新しい時代の神学はなかなか現われず・・・」（森田雄三郎「創造と進化—創造における無一」（1990）、『現代神学はどこへ行くか』教文館、2005年、216頁）、「パネンベルクの根本的態度は、トレルチを超えようとする努力を十分に果たしえず、依然として「キリスト教的ヨーロッパ」あるいは「ヨーロッパ的キリスト教」の思索の枠を超えていないからである。明らかに、その意図と具体的展開との間に、かなり大きな裂け目が、今なお開けている。」(217)

「神学界でアウシュヴィッツ以後の神学が検討され始めるのは、概括的に言えば、ドイツでは、哲学者アドルノの「アウシュヴィッツの後で詩を書くことは野蛮である」（『ミニア・モラリア』）との指摘から一〇年、一九六〇年代からで、H・ゴルヴィッツァーと共に、E・ベートゲやF・W・マルクヴァルト、B・クラップトらが参加した。このグループの場合は、主に「罪責告白」の視点からの接近と言える。他方、一九六〇年代後半以降、「神」概念の検討をも含む、この神学の取り組みが積極的に試みされてきたのは、ユダヤ人の多く居住するアメリカにおいてであった、「ヴィーゼルの小説『夜』」、「これらの神学者の応答は、「神はどこにいたか」（神義論的問い）と「人間はどこにいたか」（罪責問題的問い）という二つの問いに分化されると言える。」（金子啓一「第三章 神と現代人(2)——アウシュヴィッツ・ヒロシマと現代神学」、野呂芳男・熊澤義宣編『総説現代神学』日本基督教団出版局、1995年、332頁）

↓

2. ユダヤ教との歴史的関係の再考

反ユダヤ主義に対するキリスト教の責任。神義論的問いは次回

（1）新約聖書学—イエス、パウロ、その後—

<争点>

3. マタイによる福音書 27章

15 ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することにして
いた。16 そのころ、バラバ・イエスという評判の囚人がいた。17 ピラトは、人々が集
まって来たときに言った。「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それとも
メシアといわれるイエスか。」18 人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分
かっていたからである。19 一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言が

あった。「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」20 しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群衆を説得した。21 そこで、総督が、「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか」と言うと、人々は、「バラバを」と言った。22 ピラトが、「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか」と言うと、皆は、「十字架につけろ」と言った。23 ピラトは、「いったいどんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び続けた。24 ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」25 民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」26 そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

4. ローマの信徒への手紙 11 章

25 兄弟たち、自分を賢い者とうぬぼれないように、次のような秘められた計画をぜひ知ってもらいたい。すなわち、一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、26 こうして全イスラエルが救われるということです。次のように書いてあるとおりです。「救う方がシオンから来て、／ヤコブから不信心を遠ざける。27 これこそ、わたしが、彼らの罪を取り除くときに、／彼らと結ぶわたしの契約である。」28 福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについて言えば、先祖たちのお陰で神に愛されています。29 神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。30 あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。31 それと同じように、彼らも、今はあなたがたが受けた憐れみによって不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです。32 神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。

5. クロッサン、リューサー、パウロ研究 (タウベス、ホースリィ)

6. ジョン・ドミニク・クロッサン『イエスとは誰か——史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社、2013年。(John Dominic Crossan & Richard G. Watts, Who Is Jesus? Answering your Questions about the Historical Jesus, Westminster John Knox Press, 1996.)

「7 誰がなぜイエスを処刑したのか」

「磔は正視に耐えがたいものでした。磔刑は、国家の冷酷な暴力装置だったのです」(125)

「磔にされた場合は埋葬されません。埋葬を許さないのは、人間を完全に消去しようとすることでした。」(127)、「埋葬されるはずの遺体が残らない」(128)

「イエスの逮捕理由らしい事件は、神殿騒動です」(131)

「イエスは神殿を「浄め」たではありません。また、ここにキリスト教対ユダヤ教という筋書きはありません。神殿はローマ進駐軍の根城でした。大祭司は否応なく植民地と帝国の顔つなぎを務めます」(133)

「他の記録から分かるポンテオ・ピラトは、あの穏やかな姿と全然ちがいます」(134)

「残忍な群衆操作が彼の得意技でした」(135)

「生活手段も奪われ自暴自棄の武装抵抗をするしかないほど、下層階級は抑圧されていたわけですが」、「バラバ物語は、マルコの見たエルサレムの運命を象徴的に劇にしたものです」(136)

「古典と現実が交錯して互いに影響し合い出すのです」(138)

「イエスの最初の支持者たちは、彼の磔刑と死と埋葬について詳細を知らなかった。それを詳しく描き出すために、旧約聖書の文章を一世紀の事件に転用した。」(139)

「「ニュース」とは福音の特徴を示します。つまり更新されるのです」、「福音書は内容を更新する。だからイエスひとりに複数の福音書があるわけです」(140)

「この段階では反ユダヤ主義ともユダヤ人差別とも言えません」、「そのヨハネにしてもユダヤ人と非ユダヤ人を区別していたとは思えません」、「ところが四世紀にローマ帝国がキリスト教を国教にしたとき、まさにあの磔刑物語がキリスト教徒にユダヤ人を責め立てる口実を与えてしまい、ヨーロッパの命取りになる恐ろしいホロコースト時代を準備する長い歴史が始まります。」(141)

「つらいことですが、おそらくイエスはいきなり捕まって処刑されたのでしょう」(142)

「伝承が膨らむと、イエスの埋葬者は敵から友達になって、急場しのぎの不十分な埋葬から十分に完璧な埋葬になります」(144)、「磔刑の無残な幕切れを避けようとした懸命の努力」(145)

「こうした生け贄の神学は、他のキリスト教共同体には影響しませんでした」(148)

7. ジョン・ドミニク・クロッサン『誰がイエスを殺したのか——反ユダヤ主義の起源とイエスの死』青土社、2001年。

「キリスト教は、ユダヤ教内部の一セクトとして誕生した。そしてある地域ではゆっくりと、他の地域では急速に拡大し、最終的には新たなひとつの宗教として独立した。もしこれが、最後まで宗教のレベルに於いて行なわれていたならば、双方の非難と侮辱は全く無害なものに終始していただろう。だが、四世紀にキリスト教がローマ帝国の国教となり、キリスト教ヨーロッパが誕生すると、反ユダヤ主義は単なる神学的論争から、致命的なものへと変貌した。これらの受難＝復活物語が、キリスト教の支配する世界で語られたらどうなるか考えていただきたい。これらの物語こそが、特定の人々を虐殺に駆り立てたのでなかったのか。」(14-15)

8. 新しいパウロ解釈：1980年代以降

体制派パウロから戦うパウロへ。政治哲学におけるパウロへの注目。

アメリカの聖書学会（SBL）の「聖書と帝国」分科会（*The Bible and Empire Unit*）

パウロ・ルネサンス、イエスからパウロへ。

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）

「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」（ジジエク『操り人形と小人』青土社、195）

9. 現代思想におけるパウロ → バディウ、アガンベン、ジジエク

古代の歴史的・思想的文脈におけるパウロ

ユダヤ思想の文脈におけるパウロ

聖書学的議論（従来の閉鎖的な議論に対して）への新たなる問題提起

10. Rosemary Radford Ruether, *To Change the World. Christology and Cultural Criticism*, SCM Press, 1981.

There are two elements in a correction of the anti-Jewish reading of Jesus' criticism of religion. On the one hand, we must recognize that prophetic criticism is always internal criticism, a criticism that springs from loyalty and commitment to the true foundations of the people whom you criticize. It is fundamentally distorted when it becomes simply the repudiation of another people who are no longer your own. Therefore whatever is valid in the denunciation of legalism

and hypocrisy in the gospels must be appropriated by Christians as self-criticism. We must translate words such as 'scribes' and 'Pharisees' into words such as 'clerics' and 'theologians'. Since most of us who have the chance to do that are ourselves clerics and/or theologians, it should be evident that what is being criticized is not Christianity or even Christian leadership, but certain false ways of setting up leadership that crushes the message of the gospel. We might remember that Jesus himself was called 'Rabbi' by his apostles.

This kind of internalization of the gospel critique of religion is already quite common in Christian theology and preaching. Many liberal and liberation theologians, such as Hans Küng or Leonardo Boff, put particular emphasis on this denunciation of false religion precisely for the purpose of criticizing fossilized hierarchical religion within their own religious communities.

However, this internalization of the gospel criticism of religion will not overcome the anti-Judaic stereotype unless we are willing to concede to the Judaism of Jesus' day the same religious validity that we attribute to our own Christian faith. Surely we expect our own religion not only to survive, but to be purified through such criticisms? If Hans Küng does not think that he becomes anti-Catholic because he denounces hypocritical hierarchicalism in the Catholic Church, then he should not assume that Jesus fundamentally departs from the ground of Torah and Israel when he makes a similar denunciation of false teachers.

This second principle is seldom observed by Christian scholars. Again and again we find Christian theologians, not just conservatives, but theologians on the Left, who are happy to use the gospel denunciations to criticize legalistic tendencies in their own community. Yet they continue to write as though these bad traits, which are only distortions of *their* faith, are somehow *generic* to Judaism. Indeed such anti-Judaism becomes reasserted and defended by liberal and liberation thinkers, as though the purging of the shadow side of their own faith still demanded the Jewish scapegoat as its point of reference.

This negative projection of Christian self-criticism on to Judaism can not be corrected without a positive appreciation of Judaism, of the rabbinic tradition and Jesus' place in the Judaism of his time. Christians must discover that leaders of the Pharisaic schools, such as Hillel, were making some of the same interpretations of the Law as did Jesus; i.e. that love of the neighbour is the essence of the Law. Christians must correct the stereotype use of the word 'Pharisee'. Only then will Christian exegetes and preachers be prepared to translate the New Testament language into the same kind of nuanced appreciation of Jesus' Judaism that they would expect to convey about their own Christianity; namely, a religion that contains the possibilities both of prophetic vision and of institutional reformation. (36-37)

11. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

Introduction (Richard A. Horsley)

Protestant interpreters have traditionally understood Paul in opposition to Judaism. Luther's discovery of "justification by faith" in Paul's Letter to the Romans, the solution to his frustrating quest for a sense of righteousness, became the formative religious experience through which Paul's letters have been read. Paul became the paradigmatic *home religiosus* whose quest for salvation by a compulsive keeping of the Law in his native Judaism drove him to his dramatic conversion to God's grace manifested in Christ.

This approach to Paul that has dominated NT studies for generations is based on the

unquestioned and distinctively modern Western assumptions that Paul is concerned with religion and that religion is not only separate from political-economic life, but also primarily a matter of individual faith. (1)

in the aftermath of the Holocaust

the great hero of faith who articulated foundational Christian Theology was discovered to share the same fundamental "covenantal nomism" of Judaism,

Paul's new religion of personal faith was no longer seen as sharply opposed to Judaism. (2)

12. cf. ユダヤ思想からのパウロ論：

Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993. (ヤーコプ・タウベス『パウロの政治神学』高橋哲哉・清水一浩訳、岩波書店、2010年。)

Erstens kennt er die Gemeinde nicht, weiß nur von ihren Konflikten, Heidenchristen / Judenchristen, die dort akut sind, und natürlich ist es das politische Genie des Paulus, daß er nicht irgendeiner Gemeinde schreibt, sondern der Gemeinde in Rom, dem Sitz des Welt-Imperiums. Er hatte Sinn dafür, wo die Macht zu finden ist und wo eine Gegenmacht zu etablieren ist. . . . Man kann sich der These von Johannes Munck anschließen oder nicht, daß dieses "Einsammeln" ein reales Einsammeln der Völker, auf das dann in der Tat die Parusie kommt. (26)

Ich will betonen, daß das eine politische Kampfansage ist, wenn an die Gemeinde nach Rom ein Brief, der verlesen wird, von dem man nicht weiß, in wessen Hände der fällt, und die Zensoren sind keine Idioten, mit solchen Worten eingeleitet wird, und nicht anders. Man könnte ja pietistisch, quietistisch, neutral oder wie auch immer einleiten; aber nichts davon. Meine These ist deshalb: In diesem Sinne ist der Römerbrief eine politische Theologie, eine politische Kampfansage an den Cäsaren. . . . Er(Bruno Bauer) hat etwas gesehen, daß nämlich die christliche Literatur eine Protestliteratur gegen den florierenden Cäsarenkult ist. (27)

Gesetzesbegriff, Kompromißformel war für das Imperium Romanum. religio licita
eine allgemeine hellenistische Aura, eine Apotheose des Nomos.

das Gesetze als Hypostase (36)

eine Missionsphilosophie in Gestalt dieser Nomos-Theologie

Nomos, Thora, Weltgesetz, Naturgesetz

Er strampelt sich raus aus jenem Konsensus zwischen griechisch-jüdisch-hellenistischer Missionstheologie, (37)

Sondern das ist jemand, der dasselbige ganz anders, nämlich mit dem Protest, mit einer Umwertung der Werte beantwortet: Nicht der Nomos, sondern der ans Kreuz Geschlagene durch den Nomos ist der Imperator. Das ist ungeheuerlich, und dagegen sind alle kleinen Revoluzzer doch nichtig! Dieser Umwertung stellt jüdisch-römisch-hellenistische Oberschicht-Theologie auf den Kopf, den ganzen Mischmasch des Hellenismus. Gewiß, Paulus ist auch universal, aber durch das Nadelöhr des Gekreuzigten, und das heißt: Umkehrung aller Werte dieser Welt. Also schon gar nicht der Nomos als summum bonum. Deshalb ist das politische Ladung, allerhöchster Explosivstoff. (38)

(2) キリスト教史における反ユダヤ主義

<ユダヤ人やダヤ人の運命：古代から中世へ>

13. ユダヤ戦争以後：ローマ帝国に対する反乱は最悪の結果で終わった（殺された一般市民は60万人以上に及ぶとも言われる）。

ローマ帝国の強硬な弾圧（ハドリアヌス帝）、パレスチナ・エジプト・キプロス

バビロニア（ササン朝ペルシャ）へ中心が移る。

バビロニア・タルムード編纂（490年頃）

14. イスラム世界のユダヤ人：イスラム勃興期には、ユダヤ人の弾圧政策、次第に身分差別との引き替えに信仰の自由を認める宗教政策に転換（ユダヤ人の優秀性への着目）
15. イベリア半島のユダヤ人：キリスト教への改宗の強制＝マラノと呼ばれ差別。
スファラド（ヘブライ語でスペインの意味）系ユダヤ人の成立。
13世紀の迫害（スペイン帝国での異端審問のための宗教裁判所の設置）で、
多くのユダヤ人は再度マラノになるか、国外へ追放。
16. ヨーロッパ北部のユダヤ人：
アシュケナージ（ゴメルの子の名。ゴメル→ゲルマニア）系ユダヤ人。10世紀～11世紀にかけて抑圧の強化。十字軍（11～13世紀）の影響。
1215年の第四回ラテラノ公会議（ユダヤ人抑圧の基本路線）
アシュケナージ系ユダヤ人の追放。東ヨーロッパ（ホーランド、リトアニア、ラトビアなど）へ。

<反ユダヤ主義の源泉・前提>

17. 聖書・福音書（ユダヤ戦争以降）：反キリスト教としてのユダヤ教
キリスト教起源神話におけるユダヤ的なものの成就＝克服の図式
ユダヤ教の遺産の継承しつつ、それをキリスト教化する。

18. 古代キリスト教：キリスト教の国教化と反ユダヤ主義

エウセビオスは、その『教会史 1、2、3』（秦剛平訳、山本書店）において——コンスタンティヌス大帝をキリスト教の側から正当化する歴史叙述——、「彼らユダヤ民族全体に「主を殺した者たち」（キュリオクトノイ）、「キリスト殺し」（クリストフォノイ）という人類史上前代未聞の、悪質無類のレッテルを無神経にもはりつけた最初の教会人だった」（1、287頁）。

<近代世界とユダヤ人>

19. 古代から中世までのキリスト教世界のユダヤ人：はじめは、差別されつつもその存在は一定程度認められていた。しかし、10世紀頃から、差別・迫害が強化される。

20. ゲットーのユダヤ人（16世紀中頃から250年間）

ルネッサンスや宗教改革（ルターは宗教改革当初はユダヤ人に同情を示していたが、晩年態度を変えた）も、ユダヤ人の境遇を改善するものとはならなかった。むしろ、ローマ・カトリック世界では、1555年に教皇パウルス4世によって、ユダヤ人に対してゲットーと呼ばれる指定地区に住むことが公に強制された。やがて、プロテスタント側も同様の処理を行う。

宗教改革後、地方領主は領民に自分の宗派を強制→領民の宗教統制→宗教的不寛容
ゲットー（ユダヤ人特別区を、町はずれの鑄造所・ジェットー跡に設置したことによる？）：二つ以上の門を作ることを禁止された高い壁に囲まれた隔離的な居住地区。
門の扉は外から鍵（キリスト教徒の門番が保持）。外出時は許可証の携帯、特別な服装（「恥辱パッチ」、とがった帽子）。特別税、結婚や子どもの数に制限。
ゲットー内部では自治が認められ、互助活動が盛ん、シナゴグと学校での教

育。高い教育と特有なユダヤ文化。しかし、スラム化は避けられず、建物はしばしば倒壊。

21. マラノ・ユダヤ人（隠れユダヤ教徒）

スペイン→オランダ

（アムステルダムに大きなコミュニティー、商人として成功）

→イギリス（クロムウェルは、イギリスの商業振興のために、ユダヤ商人を歓迎）

オランダとイギリスで初期資本主義の一翼を担う。宮廷ユダヤ人（国家の経済政策を担当する高級官僚）。スピノザ。

22. ハスカラー（ユダヤ啓蒙主義）：啓蒙主義・近代国民国家におけるユダヤ人解放の動向に呼応。啓蒙主義によって、なおゲットーに居住する大多数のユダヤ人を教育し、彼らをゲットーから解放することを目指す。

それぞれのコミュニティーが居住する土地の言葉（ドイツ語やフランス語など）を使用し、ユダヤ人コミュニティーの言語であったイディッシュ語を放棄する。哲学者メンデルスゾーン(1729-86)。

↓

民族的共同体としてのユダヤ教から、政教分離原則に基づく国民国家のメンバーとしての改革派ユダヤ教へ。近代市民としてのユダヤ人。

23. ハシディズム運動。東方のユダヤ人、アユケナージ・ユダヤ人。

ポーランド：16～17世紀にかけて安定（支配階級はユダヤ人の資本と才能を利用）。しかし、1648-49年に起こったポーランド貴族に対するコサック反乱の混乱の中で、およそ10万人のユダヤ人が虐殺。

↓

シャブタイ・ツヴィのメシア運動（カバラの影響）とその挫折。

この挫折における精神的危機を克服するものとして、ハシディズム（敬虔主義）が、18世紀はじまる（イスラエル・ベン・エリエゼル）。世界の救済に先立つ個人の救済。日常生活のすべての行動における神との交わり＝実践。近代におけるユダヤ的伝統の活性化の試み。

24. シオニズムとナチズム

ハスカラーの帰結。啓蒙的近代における宗教的寛容（政教分離）を背景としたユダヤ人解放＝キリスト教世界への同化。1860年代～70年代にかけて、西欧諸国では、法的レベルにおいて完了。

↓

新しいユダヤ人への差別＝反ユダヤ主義（反セミティズム、1875年の造語）

古代・中世：ユダヤ人憎悪は厳しいが、ユダヤ人もキリスト教に改宗すれば救われるというのが原則。

新しい反ユダヤ主義：ユダヤ人は「セム人種」であること自体において、アーリア系キリスト教世界にとって危険な存在である。血と文明を墮落させ、破壊する劣悪人種。

↓

生存の道は、パレスチナに帰還し国家を建設するにかない

（ヘルツェルのシオニズム）。

ナチズムによる強制収容所・大虐殺。

（3）反ユダヤ主義の深層・真相

25. 国民国家の否定的条件としてのユダヤ人

「「国民」とはある国家の正統な構成員の総体」、「近代社会における国民主権論と民主主義観念の広まりを前提すれば、国民とはその国の政治の基礎的な担い手」、「必ずしもエスニックな同質性をもつとは限らない」（塩川、7頁）

「距離が近くなればなるほど、境界を保つために差異化はより強く作用する」、「異質性よりも同質性の方がかえって差別の原因になりやすい傾向」（小坂井、21頁）

↓

国民国家における国民としての同化が差別（差異化）を強化した。キリスト教的伝統はその際に、正当化の論理を提供した。

26. 反ユダヤ主義はキリスト教自身の歪曲を伴った。ナチズムはドイツ的キリスト教というキリスト教の変質形態を発生させた。

<参考文献>

1. クロッサン『誰がイエスを殺したのか——反ユダヤ主義の起源とイエスの死』青土社。
2. マルティン・ブーバー『ハシディズム』みすず書房。
3. 市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社。
4. 村上雅人『反ユダヤ主義——世紀末ウィーンの政治と文化』講談社選書メチエ。
5. 上山安敏『ブーバーとショーレム ユダヤの思想とその運命』岩波書店。
6. 塩川伸明『民族とネイション ナショナリズムという難問』岩波新書。
7. 小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会。